

こうひんしつ
「高品質のファスナーをつくりたい」
 せ かい て き き ぎ ょう そうぎょうしゃ
世界的企業YKKの創業者

よ し だ た だ お
吉田 忠雄



商売の夢を抱いて東京へ

「東京へ行って、大きな商売をしたい」
 小学校を卒業しただけで、兄の経営する店で手伝
 いをしていた吉田忠雄さんは、東京という大都会に
 憧れ、何としてでも上京しようと考えていました。
 ちょうど、洋服が流行し始めていたころです。忠
 雄さんは、近い将来、洋服は必ず大流行するだろう
 と目をつけ、上京したら洋服生地を貿易する店に勤
 めたいと思っていました。
 洋服屋になれば、もうかるのは分かっている。で
 も、その洋服生地をあつかう貿易商になれば、もっ
 と大きな商売ができるようになるはずだ。
 そして、いよいよ待ちに待った上京のときがやっ
 てきました。夢にまで見た東京行きに、忠雄さんの
 胸はときめきました。
 「上京する以上は、きつと成功してみせるぞ！」

少しでも品質の高いファスナーを
 自分たちの手で作ろう。
 外国の製品に負けないような品を
 そのためにも、部品の一つ一つから
 自分の工場で作るようにしたい！

国内売り上げの94%、全世界では45%以上のファスナーを、YKKが作っているんだよ。

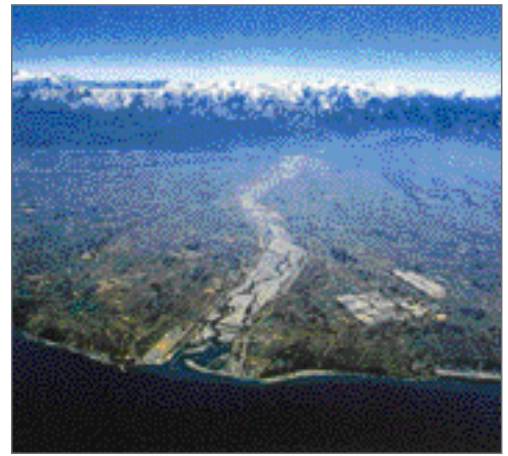
YKKは、ファスナーやアルミサッシ製品（ドアや窓枠など）を作る会社だよ。

ファスナーやアルミサッシ製品を作る機械（工作機械）も作っているんですって。



西暦	年齢	
1908年		下新川郡下中島村(現在の魚津市)に生まれる
1928年	20歳	貿易商を志して上京する。中国陶器輸入を営む古谷商店に就職する
1934年	26歳	サンエス商会をおこす
1938年	30歳	東京市江戸川区に工場を新築し、社名を吉田工業所と改名する
1945年	37歳	東京大空襲で工場が焼けたため、魚津町で、吉田工業株式会社をおこす
1950年	42歳	アメリカ製のチェーンマシーンを導入し、手工業生産から機械生産による近代工業へと転換する
1959年	51歳	生地紡績工場(現在の黒部工場)、織機工場の建設で、完全一貫生産システムが実現する
1961年	53歳	アルミ建材の生産・販売を開始する
1993年	84歳	亡くなる

吉田忠雄さんの三十二年表



黒部川一帯は、工業地帯として発展しています。

東京に着くと、忠雄さんは日本橋の古谷順平さんの家にお世話になりました。古谷さんは入善町の出身で、中国の陶器を輸入する店を経営していました。忠雄さんは、しばらく古谷商店を手伝いながら、就職先を探して歩きました。

しかし、世の中の景気が悪く、関東大震災が起きた東京では、なかなか就職先を見つけることはできなかつたので、忠雄さんは、そのまま古谷商店で働き続けることにしました。

ファスナーとの出会い

これでは、どこに何の品があるか、分からない。忠雄さんが働き始めたところの古谷商店の倉庫は、ほとんど整理整頓されておらず、商品の数も分からないという状態でした。

忠雄さんは倉庫をすっきりさせようと考えて、倉庫の物品の整理を始めました。整理をしながら、数多くの商品の名前を覚えめました。

忠雄さんの熱心な仕事ぶりは、すぐに認められ、どんどん信用されるようになっていきました。

その後、古谷商店は、ファスナーも販売することになりました。忠雄さんも、ファスナーの商売に、真剣に取り組みました。

この後、思わぬことが起こりました。古谷商店は、倒産に追いこまれてしまったのです。古谷社長は、忠雄さんに言いました。

「君は、本当によくがんばってくれた。商売の才能もあるようだ。この際、ファスナーで独立してみたらどうだ」



創業「五人の像」。会社をおこしたとき助けてくれた2人の兄と、2人の後輩、そして忠雄さんの5人が刻まれています。

「はい、挑戦してみたいと思います」
大阪のファスナーメーカーも、忠雄さんを信じて協力してくれることになりました。
こうして、忠雄さんは、ファスナーをあつかう仕事に、本格的に進んでいったのです。

次々と降りかかる困難の中で

1934(昭和9)年、忠雄さんはサンエス商会という会社をおこし、ファスナーを売る仕事を始めました。



忠雄さんについて学んだことを発表する黒部市立若栗小学校4年生のお友達。



黒部市立若栗小学校4年の梅沢真優さん、村瀬莉苒さん、吉村果恵さんが作ったカルタ。

しかし、当時、日本製のファスナーは品質が悪く、半分以上が不良品でした。

どうしたら、不良品を少なくすることができるだろうか。

忠雄さんは、考えました。

「自分たちで工夫して、少しでも品質の良いファスナーを作ろう。外国の製品に負けないものを作りたい！」

こうして、忠雄さんは商品を売ることに力を注ぐ一方で、悪いところを手作業で直すなどの努力をして、品質の良いファスナー作りにも精を出しました。そのうちに、だんだん得意先が増え、サンエス商会は順調に発展していきました。

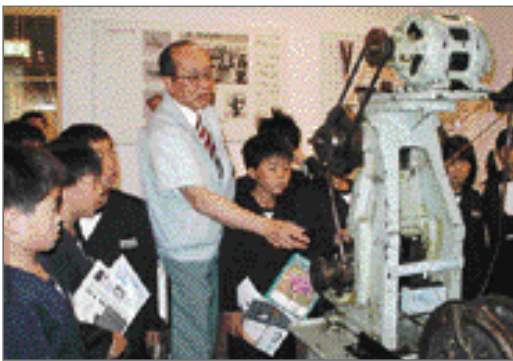
そこで、忠雄さんは新しい工場を建て、それから、金属部品は自分の会社で生産することにして、社名も、吉田工業所に変更しました。

そのすぐ後のことです。突然、忠雄さんは、大ピンチに立たされてしまいました。戦争のため、銅が手に入らなくなったのです。ファスナーのチェーンに当たる「ムシ」と「スライダー」は、銅合金でできているため、銅がなくては、ファスナーは作れません。

しかし、忠雄さんはくじけませんでした。銅がないなら、工夫して別の金属を使えばいい！

忠雄さんは、新しい素材のファスナーを作ろうと考えました。それが、アルミファスナーの第一歩でした。

その間にも、戦争は激しくなってきました。そして、とうとう東京大空襲が始まり、辺



黒部市立若栗小学校4年生のお友達が、YKKを見学しました。

り一面、火の粉が降り、工場にも火の手が上がりました。

夜が明けるのを待つて戻ってみると、工場は焼失し、焼けただれた機械の残骸が転がっているだけでした。

忠雄さんは、10年余りかけて築いてきたものを失ってしまいました。

世界に通用する商品作り

最初のころに戻ったただだけだと思えば、がんばるさ。一日も早く、工場を再建しよう。

忠雄さんは、魚津で工場再建に取りかかりました。そんな忠雄さんの様子を、多くの社員や二人の兄も協力してくれました。こうして、再び工場に活気が戻り、吉田工業所が作ったファスナーは、国内では優良品として通用するまでになりました。よし、次は海外への輸出が目標だ！



忠雄さんの子ども時代：忠雄さんは、「ゴンボの末まで知りたがる性格」と言われていました。地面の中にあるゴボウの根っこの先まで知らないと気がすまないという意味で、好奇心や探究心の強い子どもでした。



忠雄さんの信念である「善の巡環」を表現した書画。

善の巡環

「善の巡環」は、忠雄さんが自分で考えだした言葉です。これは、どういう意味なのでしょう。

実は、忠雄さんは、小学校の時に「鉄鋼王アンドリユー・カーネギー」の伝記を読んで、大きな影響を受けました。カーネギーは、アメリカの鉄鋼業界で活躍した実業家で、文化や教育などの発展にも力を注いだ人です。

忠雄さんは、カーネギーの「他人の利益を図らずして、自らの繁栄はない（自分だけの利益ではなく、他人の利益も考えることが大切だ）」という考え方に感動し、それを「善の巡環」という言葉で表現したのです。

ちよつどそのころ、製品を見るためにアメリカ人が訪ねてきました。

「わが国のファスナーに比べ、品質が良くありませんね。しかも、値段が非常に高い。これでは、とつてい取引はできません」

そう言つて笑つと、アメリカの優秀なファスナーを見せつけたのです。忠雄さんは、製品のアマリの違いに、がく然としました。もう手作業では、だめだ。アメリカのファスナー自動製造機を使わなければ！

その機械はとても高価でしたが、忠雄さんは何とか機械を取り寄せ、近代的なファスナー工場を完成させました。

さらに、忠雄さんは黒部市に工場を移転し、生地紡績工場（現在の黒部工場）、織機工場などを次々に建設し、原料から製品まで、すべてのものを自分の会社で生産するという目標を実現しました。

なんと、工場内の機械までもつくりあげたのです。

こうして、忠雄さんは品質の良い商品を作るために、努力と工夫を重ねました。

また、忠雄さんは、海外に工場を造るとき、自分だけがもうけるのではなく、現地の人々と利益を分け合えるようにしました。これは、忠雄さんが「善の巡環」と呼び、大切にしていた考え方です。

その結果、YKKという会社とその商品は、海外でも高い評価を受けるまでになったのです。

忠雄さんの経営者としての考え方である「善の巡環」は、多くの人からほめ称えられています。

忠雄さんは、国際親善、文化や教育の発展などにも、力を尽くしたそうだよ。

さまざまな困難があつたのに、努力と工夫で乗り切つた忠雄さんは、すごいです。

吉田忠雄さんの言葉

（「吉田忠雄語録」より）

強い探究心と記憶力、観察力をもっていた忠雄さんは、数多くの言葉を残しています。

もう紙一枚のすすめ

できる限り力を出した後で、もう紙一枚分の厚さの努力をその上にのせることが大切である。

ろうそくの灯火

ろうそくは、自分の身をけずつて周りを照らしている。私たちは、ろうそくのようにならなければならない。

習慣は自分の努力でつくるもの

何でも習慣にしてしまえば、苦しくはない。それができないのは、なまけ心があるからだ。根気よく努力することが大切である。

吉田忠雄さんはファスナーを通して、日本と世界を結びました。次のページは、明治時代、美術を通して、ヨーロッパの国々に日本を紹介した林忠正さんのお話です。